

第56回日本小児血液・がん学会学術集会

The 56th Annual Meeting of the Japanese Society of Pediatric Hematology/Oncology

会長 小田 慈 (岡山大学大学院保健学研究科/岡山大学病院 小児血液・腫瘍科)

Megumi Oda (Graduate School of Health Sciences, Okayama University,
Department of Pediatric Hematology and Oncology, Okayama University Hospital)

第56回日本小児血液・がん学会学術集会を、2014年11月28日(金)～11月30日(日)に、学術集会会長として、「Domestic から Global へ～break through を求めて」をメインテーマとして、岡山コンベンションセンター、岡山シティミュージアムで開催しました。国内外から約1,900名の小児血液・がん診療・研究に取り組む各領域の医療従事者・研究者の参加がありました。

はじめに：日本小児血液・がん学会と本学術集会メインテーマの背景

日本小児血液学会と日本小児がん学会は3年前に合併し、日本小児血液・がん学会となりました。この間、小児の血液疾患、腫瘍性疾患を取り巻く、社会的、学

術的環境は大きな変革の時期に入り、希少疾患とされる小児の難治性血液疾患、悪性腫瘍の治療成績の向上を図る上で必須である多施設共同臨床研究においても、いわゆる National Study や、国際共同研究の導入も当たり前と考えられる時代になりました。

このような背景から、第56回日本小児血液・がん学会学術集会のメインテーマは“Domestic から Global へ～break through を求めて”としました。

チーム医療が必須とされる小児の難治性血液疾患や悪性腫瘍を対象領域とする日本小児血液・がん学会学術集会は、伝統的に小児がん看護学会との合同開催、そしてがんの子どもを守る会との共同開催として行われています。今回の学術集会においても、合同シンポジウム、チャリティマラソン、公開シンポジウムなどを企画いたしました。

新しい試み

今回の第56回学術集会では、いくつかの新しい試みを行いました。まず、学術集会の原点に戻るため一般演題、特に、ポスター発表を重視いたしました。ポスター発表の時間帯も従来の夕方から、昼食後の時間帯とし、従来からの座長制を廃止し、代わりにモデレーターを配置し、ディスカッションが重視される体制を試みました。モデレーターは司会進行ではなく、その場の盛り上げ役となることを期待して、ベテランの先生方をお願いしました。

さらに、英語による発表を大幅に取り入れ、一般演題口演に英語セッションを設けるとともに、シンポジウムの一部も英語セッションとし、常に1会場では、公用語が英語となるように企画いたしました。発表スライド、ポスターについても可能な限りの英語での記載を求めました。

それでは、学術集会での主なプログラム、出来事をご紹介します。



学術集会会長 会長講演

国際交流

今回の学術集会で、一番強調したのは、テーマどおりの「Domestic から Global へ」ということでした。欧米から6名（第12回小児がん看護学会の招待者 Christina Baggot 女史を含む）、そして韓国小児血液・がん学会から学会理事長を含む3名の方々を招待しました。学術集会初日の11月28日（金）の夜には、外国からの招待者・家族を招き、国際交流会を岡山全日空ホテルで開催いたしました。日本側出席者は、学会理事、国際委員会委員、国際シンポジウムの日本側シンポジスト・座長など、約70名でした。

司会進行、出席者の挨拶はすべて英語で行い、非常にフレンドリーかつ、インフォーマル、かつ和気あいの雰囲気の中で、進んでいきました。一昔前まで行われていた会長招宴とは、また違った、今後の国際交流を見据えた意義ある交流会であったように思われます。また、メインテーマを反映し、明日を担う若手医師の留学意欲を高めることを目的とし、若手留学体験記セッションを設け、最近留学を終え帰国した若手医師の体験記を発表してもらいました。

日韓交流セッション

学術集会の国際化を踏まえ、永年の課題であった、韓国小児血液・がん学会と日本小児血液・がん学会の学術交流に関する調印式が、学術集会2日目の午後、開催されました。韓国側からは Hong Hoe Koo 韓国小



日本小児血液・がん学会と韓国小児血液・がん学会の学術提携の調印式典（右から堀部敬三 日本小児血液・がん学会理事長、Hong Hoe Koo 韓国小児血液・がん学会理事長、小田 慈 第56回日本小児血液・がん学会学術集会会長）

児血液・がん学会理事長、日本側からは堀部敬三 日本小児血液・がん学会理事長が、堀 浩樹 日本小児血液・がん学会国際委員長の司会のもとで、日韓学術交流協定書にサインを行い、今後の両学会の協力、学術交流の誓いを交換しました。

会長講演

会長講演では「小児血液・がん学会専門医制度の検証、そして今後、どうあるべきか」と題し、小児血液・がん学会専門医制度の設立までの経緯と現状、そして現在直面しているいくつかの制度上の問題（いわゆる2016年問題）についての講演を行いました。専門医制度は医療の質を保つ上で、極めて重要な制度であり、今後も問題解決、そして、より適格な専門医制度確立に向けて、専門医制度委員会のみならず本学会会員の全員が、真摯に協力していくことの必要性を強調いたしました。

特別講演

NPO 法人アジア・チャイルドケア・リーグの渡辺和子女史による「国境を越えた小児がんのケア&ケア：グローバルアクションとチャレンジ：Cure and Care of Childhood Cancer Across Borders：Global action and Challenge」、慶応義塾大学医学部先端医科学研究所遺伝子制御研究部門の佐谷秀行教授による「骨肉腫細胞の性状分析と分化制御による治療戦略の考案：Characterization of osteosarcoma stem cells and development of a novel therapeutic strategy regulating their cell differentiation」、九州大学名誉教授／福岡歯科大学常務理事の水田祥代先生による「輝いて美しく—医の神アスクレピオスの娘たちへのメッセージ—：Stay strong, keep on shining, better days will come」の3つの特別講演を企画いたしました。国際貢献、純粋な医科学・Science、医療分野で活躍する女性医師へのメッセージと、幅広い視野のなかで、素晴らしい講演でした。

国際シンポジウム

Joint Symposium：COG and JCCG ～ New insight in Pediatric Hematology/Oncology と、Infant Leukemia — The first actual National Study in Pediatric Hematology in Japan and International collaboration の2つのシンポジウムは、国際シンポジ

ウムとして行われました。前者では、世界をリードする米国の多施設共同治療研究グループである COG : Children's Oncology Group の白血病, 悪性リンパ腫, 神経芽腫の各治療研究代表者の 3 名のゲスト (Dr. William Carroll ⇒ 事情により Dr. Pat Brown に急遽変更, Dr. Tom Gross, Dr. Julie Park), それぞれの我が国における counter part である JCCG : Japan Children Cancer Group の 3 名の代表者がシンポジストを務め, 日米での多施設共同研究での成果と今後の展望について, 熱心なディスカッションが展開されました。後者では, まず, Dr. Fumihiko Ishikawa による乳児白血病発症に関する基礎的な研究の紹介に引き続き, 米国の COG を代表して, Dr. Pat Brown, 欧州の Inter-fant を代表して, Dr. Rob Pieters, そして我が国の乳児白血病治療研究を代表して, Dr. Daisuke Tomizawa が, それぞれの治療研究成果を発表し, 明日を見据えた, 国際的なシンポジウムとなりました。

シンポジウム

一般シンポジウムとして, 「我が国における小児脳腫瘍の治療体制の実情と問題点を考える」, 「AYA 世代に対するがん治療の問題点」, 「小児血液・がん臓器移植・再生医療」, 「小児がん治療と機能温存, その意義は」, 「血友病の診療の進歩と今後の課題」, そして小児がん看護学会との合同シンポジウム「小児がん患者の成長・発達に沿った先を見越した移行期支援」の 6 つが開催され, それぞれの会場において, 我が国における, 主導的立場にあるシンポジストの講演に引き続き, 熱い, ディスカッションが繰り広げられました。

多職種医療者合同シンポジウムと多診療科医師合同シンポジウム

今回の学術集会の新しい試みの一つとして, 「難治性白血病を考える—チーム医療: 多職種医療者の連携」, そして「難治性固形腫瘍を考える—基礎から臨床まで: 神経芽腫」を企画いたしました。チーム医療, 多診療科の協働が必須となる小児血液・がん領域で, 症例提示から始まり, 様々な立場の医療者が, 意見を交換し, 患者中心の医療を構築する場として, 今後も, このようなシンポジウムの実施が必要と感じました。

会員懇親会

学術集会 2 日目の夜, ホテルグランヴィア岡山にお



岡山大学学生サークルによる“URAJA”踊り

いて会員懇親会を開催いたしました。

多くの会員が参加しました。岡山大学小児科で白血病の治療を受け, 現在は治療しピアニストとして活躍している A さんを中心としたトリオによる清らかな演奏, そして, 岡山大学の学生たちによる“URAJA”踊りなどのアトラクションにより大いに盛り上がりました。

ハプニング その1

おりから, 米国東部は, 近来にない猛吹雪に襲われていました。そのために, Dr. William Carroll 御夫妻が, 韓国インチョン国際空港でのトランジットに遅れてしまい, 予定されていたシンポジウム, 講演に間に合わなくなるという事態が occurred。ここで毅然と立ち上がってくれたのが, 同じ米国人の Dr. Gross と, Dr. Brown でした。Dr. Brown は, 大の野球ファンで, “I'll pinch-hitting for Bill, for the New York Yankees! With pleasure” と, 予定されていなかった COG and JCCG joint symposium のシンポジストを務めてくれました。Dr. Gross も冗談交じりに飄々と, 招聘講演の日程をスイッチしてくれ, 事なきを得ました。お互いに旧知の間柄同士とはいえ, 米国人気質というか, フランクさに感謝, 感激の一瞬でした。Dr. Brown は会期中, 後楽園を訪れ, そこで説明を受けた桃太郎伝説の虜となり, 帰国後の感謝のメッセージも “Momotaro, forever” で締めくくられていました。

ハプニング その2

学術集会 2 日目の早朝には, 慣例のチャリティマラソン (がんの子どもを守る会との共催) が予定されておりました。地元, 岡山県出身のオリンピックメダリストの有森裕子さんを招いて, 後楽園の周辺を走る予定

でした。ところが、よりによって、この時間帯だけ雨に襲われました。即席の有森裕子トークショーが開催され、有森さんのユーモアを交えた、絶妙のトークに参加者一同、魅了されました。

おわりに

まだまだ、書き足りない、イベントがたくさんありました。Meet the expert, 教育セッションなど、などです。今回の学術集会で試みられた新しい試みは、2015年に山梨県甲府市で、開催される第57回の学術集會に引き継がれることになっています。

最後になりましたが、本学術集會を開催するにあた

り、ご支援、ご協力をいただいた、岡山大学大学院保健学研究科・医学部保健学科の教員、学生の方々、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科小児医科学のスタッフの皆さん、“URAJA”を披露してくれた学生サークルの皆さん、ピアノ演奏を披露してくれたAさんと友人の方々、そして、すべての岡山大学関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

平成27年3月受理
〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1
電話：086-235-6901 FAX：086-235-6901
E-mail：megoda@md.okayama-u.ac.jp